

2020年1月17日

立教大学国際学術研究交流制度
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

| | | |
|------------------|------|--|
| 受入 教員 | 所属・職 | 観光学部・教授 |
| | 氏名 | 舛谷 鋭 |
| 受入学部・研究科・研 究所 | | 観光学部 |
| 招へい 研究員 | 所属・職 | Assistant Professor, Department of Asian Languages and Cultures, National Institute of Education, Nanyang Technological University 所属機関所在国：シンガポール |
| | 氏名 | Jia Li |
| 招へい期間 | | 2019年11月19日～2019年11月27日（9日間） |
| 研究経費 | | 274,140円 |

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。
講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行
った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

| 年月日 | 活動内容 |
|-------------|--------------------|
| 2019年11月19日 | 到着、校宅入居 |
| 2019年11月20日 | 池袋キャンパス見学 |
| 2019年11月21日 | 新座キャンパス観光学研究科ゲスト講演 |
| 2019年11月22日 | 大学図書館調査 |
| 2019年11月23日 | 日本マレーシア学会関東地区研究会講演 |
| 2019年11月25日 | 大学図書館調査 |
| 2019年11月26日 | Sinophone 研究打合せ |
| 2019年11月27日 | 帰国 |

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

<11月21日：新座キャンパス観光学研究科ゲスト講演>

新座キャンパスにおいては、研究科の留学生を中心に、同時通訳を交え母語である中国語で以下の観光文学についての講演をお願いし、10名弱の大学院クラスの学生らは主に母語による聴講によって深い理解を得られた。講義後にヒアリングを行っての実感である。

「シルクロードと張騫評価」

現代中国の一带一路と比較し、古代中国のシルクロードについて概説し、前漢の政治家、外交官である張騫と中東世界のつながりなど、最近の研究動向を紹介した。

シルクロードは中国国内では西安からウルムチに至り、兵馬俑、法門寺、嘉峪関、鳴砂山、月牙泉、敦煌、火焰山など、要衝各地には現在に至る文化資源があり、古代から現在まで観光文学の源泉となっている。

こうした文化資源とそれぞれの場所に関わる作品を紹介した後、シルクロードの開拓者として「東洋のコロンブス」張騫（BC164-114）について伝記的な説明や彼に関わる史資料が紹介された。

張騫の後世の評価はシルクロード開拓の掉尾を飾る人物として肯定的なものが多い。歴代詩人によって彼は黄河流域にザクロ、ブドウ、銀杏、ソラマメなどの西域の自然資源を持ち込んだ人物として歌われている。こうした評価は漢魏朝以降の観光文学の要素からも、一般的であった。

しかし、唐『隋書西域伝』や明『史記評林』などには、王朝を疲弊させた権威主義的人物として批評が加えられている。しかし、こうした評価は漢武帝の意思に沿ったもので、彼個人を批判するには当たらないのではないだろうか。

その論拠の一つとして、司馬遷の『史記大宛列伝』『史記衛將軍驃騎列伝』における張騫への言及が、後世の『史記』評書（前記『評林』のほか『索陰』など）も参考に紹介された。記述と対照して張騫の西域踏査図などが参照され、地誌文学としての司馬遷読み直しの意図も感じられた。後世の張騫批判は個人への利益誘導や、漢武帝を唆し乱費させた二点を主に論拠としているが、本報告では、主に司馬遷の評価を元にそれらへの反駁が行われた。

<11月23日：日本マレーシア学会関東地区研究会講演>

学内で定期的に開催している学会地区研究会では、以下のシンガポール移民文学について、観光文学の視点から招へい者と議論しつつ、Sinophone についての理解を深めた。他の来場者は数名だったが、それゆえ外国語での討論を気にすることなく行えて、この間、日本にいることを忘れるほどだった。

「Anxiety Writing in 1930s Nanyang Prose: Focusing on the Supplements of the Nanyang Siang Pau (1930年代南洋華人作品に現れた焦燥—南洋商報別刷に着目して)」

当日の報告要旨：

During the 1930s in Nanyang, there were a large group of literati active within the print media industry who hoped to improve their lives or wished to enlighten their fellow citizens. Others hoped to ignite a wave of revolution. However, the above wishes and hopes all went unfulfilled, resulting in the seeds of anxiety to explicitly or implicitly appear in their writings. This commentary will use the proeses published within the supplements of the Nanyang

Siang Pau to analyse the reasons behind and characterisation for such anxiety writing. Through such analysis, we hope to verify the interactivity and continuity between Nanyang literature and China literature.

報告は英語通訳なし、質疑は中国語で行われ、フロアとの討論パートは受け入れ者が通訳しつつ、東南アジア、特に島嶼部の中国語文学（馬華文学）について補足した。

馬華文学研究の創始者、元シンガポール大学の方修や元シンガポール国立大学の楊松年らの研究者も、1930年代は南洋（東南アジア）中国語文学の画期として位置付けている。

大陸や香港台湾など中国語圏に比べ、出版状況が限られた南洋世界では、書籍はもちろん、雑誌掲載さえ覚束ず、辛うじて新聞の文芸欄でこうした移民文学は命脈を保ってきた。およそ9割の作品が新聞掲載と言われ、そのまま埋もれてしまうケースも少なくない。こうした状況下で、たとえば1923年創刊で現在に至るまで継続している『南洋商報』は貴重な一次資料と言える。中でも様々な「副刊」（別刷りまたは綴じ込み文芸ページ）は特筆すべき馬華文学の宝庫で、この中から招へい者は1930年代の「獅声」副刊のエッセイを取り上げ、南洋作家らの焦燥を見出している。

20世紀初頭は五四新文化運動の影響で、口語文学が普及し、書くことは知識人の占有でなくなりつつあった。そうした変革の時代に、南洋の華僑作家らは異国で焦燥を倍加させていた。東南アジアに居る自分たちが、中国語を使うしかないとはいえ、現地の生活に目をつぶり、祖国のことだけを記すことは正しいのか。こうした表現者へのトポスの影響をフーコーも指摘している。こうして中国語移民作家らの題材の重点は、祖国から生活の場所へシフトしていく。招へい者はマンハイムの知識人論を援用し、南洋作家らを「傍観者」と捉えている。サイドは「神は常に過ちを犯す」と言ったが、知識人移民は南洋ではしばしば下層に甘んずるしかなかった。

こうして「焦燥の文学」が生まれ落ちることになる。「私の家はどこなのか、こんなにもひどい環境のなかで」同時代の南洋作家らはひとりごちているようにも見える。「何度後悔しても、いまここに居ることは取り返せない。命がだんだん消えていく」まさに絶唱とも言える。彼らは主にアマチュアの労働者作家だが、郁達夫らプロ作家が大陸から招へいされ、新聞編集に当たる例もあった。日本留学経験もある郁は、その後スマトラ島で日本軍の通訳を務め、知り過ぎた男として始末されるのは終戦直前のことだ。

南洋作家の焦燥は生活苦だけでなく、大衆の無理解によるものもあった。移民先では知識人だけで集うこともできない。否応なく様々な背景を持つ大衆の中で生活するしかない。植民地では「国」に対するナショナリズムに頼ることもできない。こうした状況下でのエッセイには、魯迅の雑文の影響を受けたものも少なからず見られる。19世紀以降の南洋華僑はしばしば「苦力」として見られるが、こうした「知識人」が彼らとともに生活し、焦燥を深めていたことは見逃すことはできない。

彼らの焦燥のもう一つのポイントは、中華民国による革命が未だ成らないことと関わっている。国民党による共産党への白色テロも頻発していた時代で、辛亥革命や五四運動の希望が失望へ一転する。また、表現は稚拙ながら、大陸の文芸結社である太陽社や創造社の影響も見受けられる。

他の日曜以外の平日は、東南アジアの中国語文学コレクションを持つ本学図書館の資料調査を行っていただき、その結果、改めて本学蔵書の有用性を確認できた。

南洋理工大学との協定締結後、初めて招いた研究者だったが、本学の資料や研究テーマを十分にご理解いただき、今後の研究協力につなげることができた。

<11/23 学会研究会の様子>



(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

新座でのレクチャーののちに、南洋理工大を志望する学部生に引き合わせ、学習環境等をご説明いただいた。また、研究打合せの際に、同大で在外研究経験のある受け入れ教員から、近年の施設変化や制度の変更について確認し、有効な情報を得た。